

よみがえった「徳島エンゲル楽団」(2)

—徳島・板東収容所に響いたバイオリンの調べ—

南川 慶二

パウル・エンゲル(丸亀・板東)が徳島の人々に西洋音楽を指導したことから始まった徳島初の市民オーケストラ「徳島エンゲル楽団」が現代に復活した経緯と15年間にわたる演奏活動の概要を前報¹で述べた。この報告の主な目的は、ドイツ兵俘虜と徳島の人々が友好的に交流したことを記念する演奏会が市民によって自主的に企画され長期間継続してきた成果を広く周知することと、その記録を整理して残すことである。これまでの演奏活動はエンゲル・松江記念市民コンサート委員会という名称の組織が主催する形をとってきたが、実質的にはごく少数の委員による運営に頼っている。常設の楽団としての活動には至らず、企画のたびに演奏者を募集・勧誘してようやく演奏が成立するという状況は15年が経過した現在もそれほど変わっていない。直前まで演奏者が確定しないこともたびたびあり、運営担当者は当日まで自分の演奏以外にもさまざまな作業に追われ、終了後に資料を整理して記録を残すことまでには手が回らなかったのが実情である。

2006年頃には毎回必ず演奏する曲が決まりつつあり、毎年新曲を加えてプログラムが拡大した。本稿で述べるように外部から演奏家を招いて大規模な曲を演奏することにも成功するなど、多くの成果をあげることができた。これらの開催記録は出演者や観客が個人的に保管している印刷物や写真などしかなく、時が経つにつれて資料が散逸し、忘れ去られてしまいかねない。そこで前報ではすべての演奏会の日付と場所を記録に残す意図で網羅的に概要を記載した。そのため個々の演奏会の選曲の根拠や付随するイベントなどの情報やエピソードにはほとんどふれることができなかつた。続報では過去の演奏活動からいくつかについて詳細を述べるとともに、その元になった俘虜たちの演奏について考える。ここでは特にバイオリン²独奏を含む音楽に注目する。

¹ 『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第12号、2015年、49-58頁。

² 「ヴァイオリン」という表記もよく使われるが、ここでは統一のため原則として引用部分も含めて「バイオリン」とする。

徳島オーケストラとバイオリン

徳島俘虜収容所では、後に板東でベートーベンの第九交響曲を日本初演するヘルマン・ハンゼンが中心になり、早くから楽団が編成され演奏がおこなわれていた。その経緯はトクシマ・アンツァイガー（徳島新報）第1巻第1号に記されている。歌の伴奏のためにギターを発注したところ、ドイツ語を解さず西洋楽器を見たこともない日本人の楽器商が間違っ てチェロを持って来たのが発端で、もともとあったバイオリン数丁に、義援金を使ってバイオリンとビオラを買い足してオーケストラが始まったと説明されている。わずか200人あまりの俘虜のうち数人がバイオリンを持っていたことは驚きも感じるが、軍隊隊員などで個人的に弦楽器を持つ音楽好きもいたことであろう。さらに一から練習して演奏に加わろうという意欲的な人物も少なからずいたようである。

徳島俘虜収容所での演奏は徳島市民も遠巻きに聞いていた。また、明らかに日本人に聴かせようと意図した演奏もあった³。収容所から聞こえてくる音楽は市民の好奇心を刺激したようである。トクシマ・アンツァイガー第1巻第6号に、柵の向こう側で演奏を聴いている人々が楽譜や楽器を注文しはじめたと記されている。もし届いたチェロを返品してギターに取り替えていたとすれば、俘虜たちばかりか徳島市民の音楽環境も違ったものになったかもしれない。

彼らが徳島俘虜収容所で演奏した曲目はトクシマ・アンツァイガーに詳しく記載されており、現代に復活した徳島エンゲル楽団はそれを参考に演奏曲を選んでいる。演奏形態は多彩であるが、ここではバイオリンに関係する曲に注目する。第1巻第1号（1915年4月5日付）掲載の「本日の演奏会⁴」は2部構成で、前半に多少シリアスな曲、後半は親しみやすい曲が配置されていた。

第1部

- 1 モーツァルト 弦楽四重奏曲作品80
- 2 チャイコフスキー カンツォネッタ（バイオリン協奏曲から）
独奏 ハンゼン一等音楽兵曹

³ 前報に記したお鯉さんの談話（収容所から聞こえてきた西洋音楽に驚いた）のほか、中野好夫著『主人公のいない自伝：ある城下市での回想』（筑摩書房 1985）にも、徳島俘虜収容所に隣接する徳島中学校（現在の城南高校）に通っていた著者がドイツ兵たちの「ドナウ川のさざなみ」や「かっぱれ」などの演奏を聴いたことが記されている。「ドナウ川のさざなみ」は後述のように丸亀でエンゲルも演奏したことや徳島エンゲル楽団が熱心に練習したことなどから、人気のある曲目だったことがわかる。

⁴ トクシマ・アンツァイガーに掲載されている最初の演奏会。翌週発行の第2号に演奏会評が掲載されており、合唱団が「前回」と同じ曲を再度歌ったことや、「舞台がこれまでとは異なり」使いやすという記述があることから、トクシマ・アンツァイガー発刊よりも前から何度か演奏会がおこなわれていたことがわかる。

(第2部 略：歌、ワルツ、行進曲など)

演奏会評を見ると、まずモーツァルトの弦楽四重奏曲について、「驚くほど演奏が軽妙で合奏が正確だった」と高く評価している。楽譜通りの編成とすれば⁵、バイオリンが2人、ビオラとチェロが各1人である。正確な演奏と評されていることから、弦楽器をある程度高い技術で演奏できた人物がハンゼンのほかに少なくとも3人いたと想像される。チャイコフスキーの協奏曲⁶については、「贈られた拍手のほとんどは、ソリストのハンゼン氏のおかげである」と書かれている。「楽器をきちんと使いこなし柔らかくゆったりした響きを持つ」演奏だったという表現から、この協奏曲の優美な第2楽章を見事に演奏するハンゼンの姿が目浮かぶようである。

チャイコフスキーが53歳の若さで急死したのは1893年のことであり、もしこの演奏会がおこなわれた1915年まで存命したとすれば75歳である。また、俘虜たちがよく演奏した「美しく青きドナウ」などの作曲者ヨハン・シュトラウス2世が没したのもほぼ同時期の1899年である。現代人にはモーツァルト(1756～1791)もチャイコフスキーもシュトラウスも同じように「歴史上の人物」であるが、俘虜たちにはモーツァルトは昔の人だがロマン派以降の作曲家は祖父や父親あたりの世代であり、同時代を生きた人だったことになる。俘虜たちが演奏した曲は、彼らにとっては、われわれが受ける印象よりもはるかに「近代・現代」的な音楽だったのであろう。

ベートーベンのバイオリン協奏曲の「日本初演」

徳島俘虜収容所での演奏会プログラムの中で目を引くのは、交響曲や協奏曲などの大規模な曲である。それらのいくつかは日本初演とみられている。交響曲では、ハイドンの「太鼓連打」というニックネームがついた第103番(当時の番号では第1番)が1916年4月16日に日本初演された。協奏曲で注目すべきものは、バイオリン協奏曲の王者とも呼ばれるベートーベンのバイオリン協奏曲の日本初演である。1915年11月14日の第26回演奏会(第1回シンフォニー

⁵ 初期は楽譜がほとんどなく、ハンゼンが編曲したり記憶を元に書いたりしたという記述もあり、四重奏曲を4人で演奏したとは限らない。あるパートが欠けても演奏は一応可能であるし、初心者が多い場合は逆に人数を増やして演奏したかもしれない。

⁶ 作曲当初は名バイオリニストのレオポルド・アウアーが演奏不可能として初演を拒否し、初演(1881年)の指揮者ハンス・リヒターも評価しなかった。初演の独奏者アドルフ・ブロッツキーが何度も演奏したことで次第に真価が認められ、後にはアウアーも積極的に演奏するようになったと伝えられている。1915年にハンゼンが日本で演奏したという事実から、この頃には広く人気を博していたことがわかる。

コンサート)でハイドンやモーツァルトの曲とともにハンゼンの独奏と徳島オーケストラによってまず第1楽章が演奏され、翌1916年1月23日の第31回演奏会(第3回シンフォニーコンサート)で第1楽章から第3楽章までの全曲が通して演奏された。45分程度かかる大曲であるためか、全曲を通す前に第1楽章のみを演奏したことから、ハンゼンの慎重な姿勢が伺える。

この曲はエンゲルも丸亀で部分的に演奏し、後に板東で全曲を演奏しているが、面白いことにエンゲルが先に演奏したのは後半の第2楽章と第3楽章であった。演奏時間では第1楽章が全体の半分を占めることと、第2楽章と第3楽章は続けて演奏されることから、部分的に演奏する場合は第1楽章または第2・3楽章の選択になる。この違いがハンゼンとエンゲルの曲に対する考えによるのか、共演する楽団の技術を考慮したのか、あるいは徳島と丸亀の楽団がおかれていた状況の違い⁷⁾によるのかかわからないが、興味深いことである。楽器編成の違い⁸⁾や演奏のできばえを考慮せず単に日本でベートーベンのバイオリン協奏曲が音として鳴り響いたことを「日本初演」と呼ぶとすれば、その場所と日付は以下ようになる。

第1楽章 ハンゼン(徳島俘虜収容所、1915年11月14日)

第2楽章・第3楽章 エンゲル(丸亀俘虜収容所、1915年7月8日)

全曲(第1楽章～第3楽章)ハンゼン(徳島俘虜収容所、1916年1月23日)
なお、エンゲルが板東で全曲を演奏したのは、1919年10月19、20日「第2回ベートーベンの夕べ」であり、この時にはエンゲルオーケストラは大編成の立派な楽団になっていた。

バイオリニストとしてのエンゲル

『エンゲルオーケストラ：その生成と発展』によると、エンゲルたち6名が丸亀俘虜収容所で「寺院楽団」を結成したのは1914年のクリスマスの頃であり、翌1915年1月10日には早速第1回の演奏会が開かれている。その後2回の演奏会を経て休止状態になり、7月8日に改めて結成された「丸亀保養楽団」が

⁷⁾ ヘルマン・ヤーコプ著、富田弘訳『エンゲルオーケストラ：その生成と発展』板東(1919)によると、丸亀では金管楽器の演奏が禁止されていた。また、丸亀の俘虜たちは戦争がすぐに終わると考えて楽器を買いそろえることに慎重であったことも記されている。楽団は弦楽器とフルートと打楽器程度で、管楽器パートの大部分はピアノで補っていたようである。軍楽隊の管楽器を保有しピアノを持たなかった徳島俘虜収容所との演奏形態の違いは、それぞれの選曲に大きく影響したと考えられる。

⁸⁾ エンゲルが後半2つの楽章を「日本初演」したときの編成は、独奏者エンゲルのほかにバイオリン2人、フルート2人、オルガン1人というわずか5人の楽団であった。

第1回演奏会を開催している。そのプログラム⁹に、上記のベートーベンの協奏曲第2・3楽章が含まれる。エンゲルはプロのバイオリニストであったためか、バイオリン独奏が活躍する曲を好んで演奏している。サラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」は何度も演奏しており、1916年8月20日にはメンデルスゾーンのバイオリン協奏曲¹⁰の第1・第2楽章を演奏している。

板東移転後にエンゲルオーケストラは大編成となり、交響曲や協奏曲を次々と演奏した。1917年12月9日には第1回交響曲演奏会としてシューベルトの未完成交響曲、1918年4月28、29日にはベートーベンの交響曲第5番¹¹の前半2つの楽章を演奏している。ベートーベンの第5番は、この年の冬に第1番とともに全曲を演奏する計画であったが、スペイン風邪の流行で延期された。特に管楽器奏者は肺が弱った状態では十分に練習ができなかったようである。その代わりにエンゲルが第1回独奏演奏会をおこない、一晩の演奏会でメンデルスゾーンとブルッフのバイオリン協奏曲¹²ほかを演奏し、大好評を得ている。このほかにエンゲルは室内楽も非常に数多く演奏しており、バイオリニストとしての活動が顕著であった。

エンゲル音楽教室とバイオリン

エンゲル音楽教室が始まった経緯と練習の様子は、林啓介著『第九の里ドイツ村』（井上書房1993年）に詳しく描かれている。立木青年たちがエンゲルの指導を受け始めたのは、四国の3カ所の収容所が板東に統合移転した後の1917年秋のことで、そのきっかけは新聞記事で知った俘虜たちの音楽演奏を板東まで見物に行ったことである。見物人たちの会話に「あのひょうたんみたいなのは向こうの三味線か」（p.142）という言葉がみられる。当時の一般の人々はバイオリンを見たこともなく、呼び名も知らないのが普通だったのかもしれない。ただし、しばらく後にエンゲル音楽教室の練習会場となった立木写真館にはピアノがあったことや、徳島市からわざわざ板東まで見物に行った青年たちがバイオリンやチェロなどの楽器をただちに買いそろえたことから、地方でも都市部では西洋楽器を手にする人も少しずつ増えていた様子がわかる。

同書によると徳島エンゲル楽団結成時の編成は、第1バイオリン3人、第2

⁹ この演奏会でもプログラム後半で「ドナウ川のさざなみ」が演奏されている。

¹⁰ ベートーベン、ブラームスの曲とともに3大バイオリン協奏曲と呼ばれている。

¹¹ 日本では「運命」という副題でよく知られている。

¹² ブルッフ(1838～1920)の協奏曲第1番も3大バイオリン協奏曲とともに人気がある。この年にブルッフは80歳で存命しており、ベルリン大学から名誉博士号が贈られた。

バイオリン1人、チェロ2人、コントラバス1人という弦楽合奏団であった¹³。最初に取り組んだのは「ドナウ川のさざなみ¹⁴」である。練習は、「楽譜を読める者が少なく、エンゲルが音を出し、その音を耳で覚えて演奏する。音名で暗誦するので、どうしてもメロディ中心の練習になった。」(p. 144)という状況だった。口三味線のように「音名で暗誦」しながら音を出すのは管楽器では不可能で、弦楽器だからできたのであろう。練習の成果として「婦人会の総会に出演を依頼された」という。この「ドナウ川のさざなみ」は、当時の徳島エンゲル楽団が演奏したことが明らかになっている数少ない曲のひとつであり、現代の再現演奏会でも重要なレパートリーとしている。

ドイツ兵俘虜が残したバイオリンの音色

解放後に楽器を持ち帰らず残していった俘虜は多かったようである。鳴門市ドイツ館には、1972年の開館時に地域住民に資料の提供を呼びかけた際に俘虜と交流のあった女性から寄贈されたバイオリンが展示されている¹⁵。ベートーベンの第九日本初演に使われたと想像されるこのバイオリンの音色をよみがえらせる試みが鳴門市ドイツ館によって企画され、第九日本初演90周年を記念して2008年11月9日におこなわれた演奏会「ドイツ音楽の花束」で披露された。その時にこのバイオリンを演奏したのは、2004年3月に徳島エンゲル楽団にコンサートマスターとして客演した世界的バイオリニスト奥村智洋氏である¹⁶。曲はドイツ兵俘虜の演奏曲の記録を元に奥村氏が選び、エンゲルが1919年3月22日に徳島市の芝居小屋で開かれた和洋大音楽会で演奏した「かっぱれ」や、1919年5月18, 19日に演奏したヴィエニャフスキのバイオリン協奏曲から第2楽章「ロマンス」などの5曲が演奏された。大切に保管されていたバイオリンが長い時を経て当時の響きをよみがえらせたことでこの演奏会は大きな話題になり、ニュースとして報道されたほか、新聞のコラムにも採り上げられた。さらに、この演奏会の翌日11月10日には、奥村氏は徳島市の徳島文理大学を訪問し、音楽学部の授業の一環として同大学のむらさきホールにおける即席演奏会の中でもドイツ兵俘虜のバイオリンの音色を披露した。

¹³ 後に管楽器を加え「徳島シンフォニーオーケストラ」と改称したが、人々は相変わらず「エンゲル楽団」と呼んだ。(林啓介他著『板東ドイツ人捕虜物語』海鳴社 1982年)

¹⁴ ルーマニアの軍楽隊長イワノビッチが作曲。1889年パリ万博での演奏で世界的に有名になった。日本では歌詞がつけられ1902年に慶應ワグネルソサエティ合唱団が歌った。

¹⁵ 鳴門市ドイツ館館報『ルーエ』第14号(2006年3月)によると、その後同館にはさらに2丁のバイオリンが寄贈されている。展示も含めすべて日本の鈴木バイオリンである。

¹⁶ 2008年に奥村氏が徳島に招かれたことには徳島エンゲル楽団は関与していない。

バイオリン名曲の再現演奏への取組み

奥村氏が2004年、2009年、2012年の3回にわたってコンサートマスターとして演奏した際には、オーケストラとは別に独奏も披露した。たとえば2012年5月19日の「エンゲル・松江記念市民音楽祭¹⁷」では徳島出身の作曲家南能衛を顕彰するため「村祭」を奥村氏自身が無伴奏バイオリン用に編曲したものと、バッハの無伴奏バイオリンソナタ第1番からアダージョとフーガが演奏された。曲自体は俘虜たちのプログラムとの直接的な関係はないが、オーケストラの演奏会の途中で独奏曲を挟むという形式は、ハンゼンやエンゲルがおこなった演奏会の再現とも言える。



奥村氏の無伴奏独奏曲を取り入れた演奏会（2012年5月19日 あわぎんホール）

¹⁷ プログラムは前報(本稿脚注1)を参照

2012年の演奏会が過去最大の観客数を得て大成功した後、奥村氏と相談してベートーベンのバイオリン協奏曲の演奏に向けての準備を始めた。徳島エンジェル楽団の編成ではベートーベンの楽譜通りに演奏することはできない。これまで演奏した曲のように編成に合わせて編曲するか、楽団の編成を大きくするかを検討し、徳島大学交響楽団に協力を呼びかけてオリジナル編成で演奏することにした。徳島大学交響楽団は学生サークルとして長い歴史を持ち、毎年定期演奏会を開くとともに、県南部への訪問演奏会、中・四国国立大学連合演奏会など、1年間に何度も演奏機会を持っている実力のあるオーケストラである。しかし、学生たちが学業と両立させながら演奏会本番と練習のスケジュールを組んでいるのとは別に大曲をプロの独奏者と共演できるレベルに仕上げるには制約が非常に大きかった。また、卒業・入学によりメンバーが毎年入れ替わり、団長やパートリーダーなどの役員も毎年交代するため、長期的な計画を立てるのは困難であった¹⁸。早くからスケジュールを調整し、練習日程や会場の問題を解決する必要があった。学生の代表者と相談しながら綿密に調整して開催時期を6月下旬と決め、合同練習を徳島大学でおこなう計画を立てた。さらに事前のイベントを実施することで参加意欲を喚起することに務めた結果共演が実現し、2013年6月23日に開催した演奏会は大好評を得た。この成功に至るまでに企画したイベントは、奥村氏による「公開レッスン」と「レクチャーコンサート」である。以下にそれぞれの実施内容を紹介する。

公開レッスン

2012年5月19日（土）にあわぎんホールで開催したエンジェル・松江記念市民音楽祭は奥村氏をコンサートマスターに迎え、充実した演奏が好評を博した。翌日の20日（日）13時から15時まで、とくぎんトモニプラザ5階音楽室において奥村氏を講師として青少年のための公開レッスンを開催した。情報は演奏会で周知したほか、5月16日付徳島新聞に写真入りの紹介記事と催し参加者募集欄に掲載された。受講希望者は楽器と楽譜持参、事前申込も参加費も不要として参加を呼びかけた。一般公募および徳島大学交響楽団の学生を受講生とし、持参した曲を弾いて奥村氏が助言する形で進行した。

¹⁸ 2009年に徳島大学交響楽団から2人が参加したが、翌年にはそれぞれ異なる事情で参加できず、ほかの学生に引継ぐことも容易ではなかったため、その後に継続的な協力を得ることはできなかった。練習日程が合わないことや練習場所に大型楽器を運ぶ手段がないことなど、さまざまな問題点があった。



奥村智洋氏公開レッスンとミニコンサート（2012年5月20日 とくぎんトモニプラザ）

聴講して印象に残ったのは音程と和音に関する丁寧な指導であった。バイオリンの音程はピアノで平均律の音をとって覚えてはいけないという説明の後、二人の受講者が互いに聴き合いながら和音を響かせる練習を何度か繰り返したことで、たちまち透明感のある美しい響きに変わっていった。このほか、模範演奏を示しつつ受講者と対話しながら観客にもよくわかるように詳しく説明がなされ、充実したレクチャーがおこなわれた。最後に奥村氏によるミニコンサートとして、パガニーニの練習曲「狩り」が演奏された。このイベントは翌年の演奏会に直接つながるものではなかったが、徳島大学の学生が多数参加したことは共演に向けての意欲向上に役立ったと思われる。

レクチャーコンサート

ベートーベンのバイオリン協奏曲を2013年6月23日に演奏することを決めた後、長期的に計画を立てて練習を重ねた。自主練習がある程度進んだ頃に合同練習を設定することにした。学生は定期演奏会等のため月水土曜の週3回を練習日としていた。徳島エンゲル楽団との合同練習は隔週金曜夜に設定し、10月下旬から徳島大学学生会館や音楽練習棟で練習を開始した。翌年2月前半は期末試験のため、また3月・4月は定期演奏会（5月4日）の練習優先のため、合同練習はおこなわなかった。この間は徳島エンゲル楽団もバイオリン協奏曲の練習を中断したが、学生の合唱団である徳島大学リーダークライスとの合同練習とバルトの庭における演奏会を実施し¹⁹、プログラム前半に演奏する合唱付きの曲を仕上げることに集中した。

¹⁹ 学生の合唱団との合同練習と演奏会については今後別稿で紹介する予定である。



徳島大学交響楽団との合同練習（2012年11月30日 徳島大学学生会館）

学生たちの定期演奏会が終わった後、共演の練習に集中した。協奏曲の練習に毎回奥村氏を招くことはできないため、学生コンサートマスターが代役を務めた。しかし本番前のリハーサルだけでは不安もあり、2週間前の金曜夜に奥村氏とのリハーサルを設定した。数時間のリハーサルだけのために東京から往復することは時間的にも費用の面でも不経済であるため、この機会に奥村氏の演奏会を企画した。前半は奥村氏の無伴奏独奏、後半は奥村氏の提案で、ベートーベンのバイオリン協奏曲の解説を公開レッスン形式で実施した。

奥村智洋バイオリンレクチャーコンサート

日時：2013年6月8日(土) 18:30 開演 20:15 終演

場所：あわぎんホール 5階小ホール

第1部 奥村智洋無伴奏バイオリン演奏会

曲目 無伴奏バイオリンソナタ第1番(バッハ)

無伴奏バイオリンソナタ第2番、第3番(イザイ)

第2部 レクチャー(公開レッスンと解説)

バイオリン：林田圭祐(徳島大学交響楽団) ピアノ：加藤佳子

曲目 バイオリン協奏曲(ベートーベン)より

第1部では奥村氏が得意とするバッハとイザイの無伴奏ソナタが演奏された。会場がコンサート用のホールではなかったため、奥村氏の希望で演奏は客席の近くでおこなわれ、美しい音色を間近で堪能することができた。バッハはその少し前にCDにレコーディングされたばかりであり、前述のようにエンゲル・松江記念市民音楽祭でも一部が演奏された曲である。難曲として知られるイザイとともに、充実した演奏が大好評を博した。

第2部の前半では、このコンサートの2週間後に大ホールで徳島エンゲル楽団・徳島大学交響楽団と共演するベートーベンのバイオリン協奏曲についての解説がおこなわれた。その内容を簡単に紹介する。

ベートーベンがこの曲を作曲したのは36歳の充実した時期にあたる1806年であり、同年にはピアノ協奏曲第4番やラズモフスキー弦楽四重奏曲、交響曲第4番などの名曲が作曲されている。この長くて難しい協奏曲の初演は同年12月23日にフランツ・クレメンスというバイオリニストがほとんど初見のような練習不足で行い失敗に終わり、そのためか長い間忘れられていた。その後名バイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムの尽力で知られるようになり、現在ではバイオリン協奏曲の最高の名曲として位置づけられている。



レクチャー前半：演奏を聴きながら解説（2013年6月8日 あわぎんホール5階）

続いて、ピアノ伴奏による徳島大学交響楽団コンサートマスターの学生の演奏を交えて曲の構成についての詳細な解説がおこなわれた。長い導入部をピアノ

ノで聴いた後、オーケストラとの共演では独奏者がずっと手持ち無沙汰で待っていることからわかるように、この曲はオーケストラが非常に重要な役割を果たしているという説明があった。ピアノと奥村氏自身のバイオリンと、時には見事な歌声も使って、第1楽章の第1主題と第2主題を紹介することで、この楽章がソナタ形式で構成されていることがわかりやすく説明された。続く第2・3楽章の構成や形式についても一通り説明がなされた後に、主要部分を学生の演奏で聴きながら公開レッスンの時のように演奏方法の指導をする形で進化した。時には熱の入った模範演奏もおこなわれ、充実したレクチャーとなった。これまでの練習で立派に代役を務めた学生が成果を披露することができた上に、奥村氏による詳しい解説や技術的な指導もたいへん興味深いものであった。



レクチャーの後半：演奏法の指導と模範演奏（2013年6月8日 あわぎんホール 5階）

このレクチャーコンサートは、単に演奏を聴くだけではなく、ひとつの曲の作曲から初演とその後の演奏史を知り、さらに曲の構成に関する専門的な話も聴いた上でポイントの聴きどころを実演で紹介してもらえたことで理解が深まり、オーケストラとの共演を聴くためにたいへん役立つイベントになった。演奏会に先立つレクチャーは第九日本初演前におこなわれたヘルマン・ボーネルによる講演に通じるものがある。熱心に準備した演奏会を成功させるために聴衆には事前に知識を得て深く理解してほしいという思いは、当時の俘虜たちも同様に持っていたかもしれない。

日本初演を再現する演奏会の開催

合同練習もリハーサルも十分とは言えないが曲作りは進行し、2週間後にはいよいよ本番である。前日のリハーサルは徳島大学学生会館でおこなわれた。楽団員と合唱団員が揃うと、学生会館が狭く感じるほどであった。



徳島大学交響楽団との合同練習（2013年6月22日 徳島大学学生会館）

本番の2013年6月23日（日）、徳島エンジェル楽団・合唱団と徳島大学交響楽団、徳島大学リーダークライスの共演で、ベートーベンのバイオリン協奏曲が徳島市で日本初演されたことを記念する演奏会を開催した。女声合唱団フラウリッヒ・ヴォカールのメンバーも加わり、出演者総数は100名におよんだ。

第 14 回エンゲル・松江記念市民音楽祭²⁰

日時：2013 年 6 月 23 日(日) 13:30 開演

場所：あわぎんホール

第 1 部 日独友好と大正ロマンの歌

曲目 友愛の花、美しき天然、異国の丘、荒城の月、ゴンドラの唄
ドナウ川のさざなみ、歓喜の歌

第 2 部 徳島市で日本初演されたバイオリン協奏曲

曲目 バイオリン協奏曲ニ長調（ベートーベン）
美しく青きドナウ（J. シュトラウス）

指揮：岡山茂幸

演奏：徳島エンゲル楽団・合唱団、徳島大学交響楽団

徳島大学リーダークライス、フラウリッヒ・ヴォカール（賛助出演）

特別出演：奥村智洋（Vn）



第 1 部 日独友好の歌、大正ロマンの歌のステージ（2013 年 6 月 23 日 あわぎんホール）

²⁰ 2010 年まではチラシやパンフレットなどに回数を記載していなかった。2011 年から徳島エンゲル楽団のブログ（<http://ameblo.jp/engel-tokushima/>）で演奏会の予告や開催記録を掲載する際に各回を区別して表記する必要から通算回数の付記を始めた。当時は正確な開催記録の資料がなく関係者の記憶を元にしたことから、後に実際の回数との差異が明らかになった。そのため現在も印刷物や公式書類では回数表記をしていない。インターネット上の情報としては、上記ブログと徳島エンゲル楽団のホームページにおいて（<http://engeltokushima.jimdo.com/>）回数付きの表記で長期間公開してきたため、混乱を避けるために修正せず、新しい演奏会にもそのままの通算回数を継承している。



第2部 ベートーベンのバイオリン協奏曲（2013年6月23日 あわぎんホール）

第1部は毎回演奏している日独友好と大正ロマンの歌であったが、徳島大学交響楽団が加わった大編成のオーケストラと、フラウリッヒ・ヴォカールと徳島大学リーダークライスの協力を得た50人の合唱団で充実した演奏をすることができた。客席には歌声もよく届いたようで、大好評であった。第2部では合唱団は出演せず、奥村氏の独奏と合同オーケストラによりベートーベンのバイオリン協奏曲が徳島市での日本初演を記念して演奏された。奥村氏の演奏には大きな拍手が贈られ、アンコールとして無伴奏で「村祭」が演奏された。演奏会の締めくくりは、ドイツ兵俘虜たちが何度も演奏した「美しく青きドナウ」、アンコールには「ラデツキ行進曲」を演奏し、大きな拍手とともに終了した。

アンケートによると、演奏についての感想は好意的なものばかりで、特に奥村氏の演奏に感動したという記述が多かった。その一方で、聴衆のマナーについての苦情が散見されたのは運営に関する反省点である。周囲の人々のマナーが気になるのは集中して演奏を聴きたいという意識のあらわれであり、熱心な聴衆が多く存在したことを示すものと受け止め、今後の運営改善に役立てることとした。全体的には来場者の反響は非常に好意的であり、構想から1年以上かけて多数の学生の協力を得たことで実現した日本初演を記念する再現演奏そのものが、よみがえった徳島エンゲル楽団にとって記念すべきものとなった。また、以上に述べたように、奥村氏は徳島エンゲル楽団演奏会におけるバイオリン名曲の再現演奏のみならず、さまざまな形で徳島におけるドイツ兵俘虜との交流を記念するイベントにも大きく貢献した。

ツィゴイネルワイゼンの野外演奏

2014年は第一次世界大戦が勃発して日本各地に収容所が開設されてから100年目にあたる。徳島では「鳴門の第九」に代表されるように板東俘虜収容所に注目が集まりがちで、徳島市に収容所があったことは市民にもほとんど知られていない。100年前に徳島市に俘虜たちが到着したことを記念して、まず4月27日に旧徳島城表御殿庭園でエンゲル・松江記念市民音楽祭を徳島城博物館と共同で開催した。前年の学生との共演は大成功をおさめたが、この共演企画を進める過程で学生側の負担が相当大きいことや準備に多大な労力がかかることなどから、毎回同様に実施するのは困難と判断し、本来の徳島エンゲル楽団・合唱団の編成で演奏する形に戻ることにした。

第15回エンゲル・松江記念市民音楽祭²¹

日時：2014年4月27日(日) 13:30 開演

場所：旧徳島城表御殿庭園

第1部 子供邦楽演奏（箏、三味線）

曲目 さくらさくら、阿波踊りぞめき 他

演奏：阿波の民謡を学ぶ教室（小中学生）

第2部

曲目 友愛の花、美しき天然、異国の丘、荒城の月、ゴンドラの唄

木枯（尺八独奏：英崇夫）、ドナウ川のさざなみ、花は咲く

村祭、ツィゴイネルワイゼン（Vn: 今津崇晴）

フィガロの結婚より「序曲」「もう飛ぶまいぞこの蝶々」

美しく青きドナウ、歓喜の歌

指揮：岡山茂幸

演奏：徳島エンゲル楽団・合唱団、徳島大学リーダークライス

フラウリッヒ・ヴォカール（賛助出演）

第1部は子供たちの邦楽演奏で阿波踊りぞめきなどが演奏された。邦楽演奏は和洋大音楽会の再現を意図して、エンゲル・松江記念市民音楽祭という名称が定着した頃から取り入れている。第2部では、エンゲルが丸亀時代から何度も演奏したサラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」を団員の今津崇晴氏の独奏で演奏した。リハーサル時には風が強く、何度も楽譜が飛ばされそうになった

²¹ 通算回数としては14回目にあたるが、脚注19に記した事情で15回と表記している。

が、本番時には風が弱まってスムーズに進行し、独奏者とオーケストラに大きな拍手が贈られた。

この演奏会の企画時には、翌々日の4月29日(祝)も候補日にしていて、結果的には27日は風が強かったものの晴天に恵まれたが、翌日から雨になり、29日は台風のような大荒れの天候となった。もし本番時に雨が降ったり、逆に日差しが強かったりすると、楽器や演奏者への影響が大きい上に、観客も快適に演奏を楽しむことができない。開催できたのは幸運だったとも言え、天候が安定しない春に野外演奏会をおこなうことはリスクが大きいことを実感した。



ツィゴイネルワイゼンの演奏（2014年4月27日 旧徳島城表御殿庭園）

ドイツ兵俘虜来徳 100 周年記念演奏会

ドイツ兵俘虜たちの徳島到着が1914年12月であったことから、100年目の12月に演奏会を開催する計画がもちあがり、秋風も吹き始めた頃に急遽12月21日に開催することが決まった。当初は徳島俘虜収容所が置かれた県庁での開催を要望したが許可が得られず、他会場も直前では空きがない状況であったが、徳島大学常三島キャンパスに新設された地域連携プラザの大ホールを利用できることになった。4月に演奏した曲のほかに、ハンゼンが徳島俘虜収容所で演奏した曲を中心に少人数の弦楽合奏と木管楽器で演奏可能な曲を選んだ。しかし練習回数は限られ、日程的に不都合なメンバーも続出して演奏会成立が危ぶまれた。ハンゼンが演奏した曲にはバイオリン独奏を含む曲がいくつかあることから、奥村氏に独奏での出演を打診したところ、前日に東京で演奏会がある

というハードスケジュールにもかかわらず快諾を得ることができた。そこで、前述のチャイコフスキーのカンツォネッタとベートーベンのロマンス第1番²²を共演曲に選んだ。それに加えて、過去の演奏会と同様にバッハの無伴奏曲と村祭の独奏を加えることにした。奥村氏の独奏と徳島エンゲル楽団との共演を中心においたプログラムを編成することで、趣旨に沿った新曲を加えた演奏会を短時間で準備し、無事に成立させることができた。

ドイツ兵俘虜来徳100周年記念音楽会

日時：2014年12月21日(日) 13:30 開演

場所：徳島大学地域連携プラザ常三島けやきホール

曲目

日本の歌（友愛の花、美しき天然、荒城の月、ゴンドラの唄）

クリスマスメドレー（J.S. バッハの音楽）

(1) 主よ人の望みの喜びよ (2) アヴェ・マリア（バッハ・グノー）

(3) 管弦楽組曲第3番より「アリア」

奥村智洋バイオリン演奏 共演：(3) 中村太(Key) (4) 徳島エンゲル楽団

(1) 無伴奏パルティータ第2番 BWV1004, 第3番 1006 より (J.S. バッハ)

(2) 村祭（南能衛作曲・奥村智洋編曲）

(3) カンツォネッタ（バイオリン協奏曲第2楽章）（チャイコフスキー）

(4) ロマンス第1番ト長調（ベートーベン）

フィガロの結婚より「序曲」「もう飛ぶまいぞこの蝶々」（モーツァルト）

美しく青きドナウ（J. シュトラウス）、歓喜の歌（ベートーベン）

指揮：岡山茂幸

演奏：徳島エンゲル楽団・合唱団、徳島大学リーダークライス

徳島大学のけやきホールは多目的型の大講義室であり、音響やステージ配置に多少不都合な面もあるが、徳島大学にはドイツ兵俘虜の研究者が在籍していることや、学生が演奏に参加したり来場したりすることも容易であるという利点がある。前半は徳島エンゲル楽団・合唱団と徳島大学リーダークライスの有志で恒例の日本の歌を演奏した後、ハンゼンによる「クリスマスメドレー」の

²² バイオリン独奏とオーケストラのための小品。旋律の美しさで知られる第2番と比べて「地味な」選曲であるが、重音奏法が多用された独奏は技術的に難しく、技巧に優れたハンゼンが自信を持って演奏したと想像される。

再現としてバッハの音楽をメドレーで演奏した²³。このうち管弦楽組曲の aria はクリスマスとは特に関係ないが、バッハの曲で統一感を持たせることと、別の演奏会でハンゼンが演奏した²⁴ことからメドレーに加えた。

奥村氏との共演では、チャイコフスキーのカンツォネッタは楽団の編成と練習期間の問題からオーケストラ伴奏は断念し、キーボード伴奏とした。ベートーベンのロマンスでは足りない楽器のパートをキーボードで補い、小編成の楽団で演奏した。このような臨機応変の演奏形態は、ハンゼンが徳島俘虜収容所で初期の頃におこなった工夫まで含めてそのまま再現しているようでもある。奥村氏の演奏は大好評であり、初めての徳島大学での開催は成功に終わった。



奥村氏とのロマンス第1番のリハーサル (2014年12月21日 徳島大学)

本稿ではバイオリンに注目してこれまでの演奏活動をふりかえった。バイオリンは演奏に多少の訓練を必要とするが、持ち運びができる身近な楽器である。当時の徳島の人々が初めて聴き、また指導を受けて演奏したバイオリンの音色は魅力的に響いたことであろう。鳴門の第九100周年記念事業が華々しく計画される中で、交響曲の演奏ばかりでなく、ハンゼンとエンゲルという2人の優れた「バイオリニスト」の功績も記憶にとどめたいものである。

²³ ハンゼンがメドレーに使った曲は手持ちの資料には記載がないため、楽器編成や短期間で練習できる難易度などを考慮して、バッハのキリストに関係する曲を選んだ。

²⁴ トクシマ・アンツァイガー第1巻第18号(1915年8月1日付)の演奏会プログラムにバッハの『ニ長調組曲』より「アリア」(ソロ・ヴァイオリンとオーケストラ)と記載されている。ピアノ伴奏編曲版が「G線上のアリア」として有名であるが、表記からオリジナルの弦楽合奏版で演奏されたことがわかる。記事には「これらの曲はとても期待できる。(中略)バッハのバイオリン独奏曲が入っているからだ」との記述がみられる。

最後に、徳島エンゲル楽団の演奏会開催とイベント等への出演を一覧として下表に示す。「100周年」を契機に会場を徳島大学に移したことから、ドイツ兵俘虜研究者との交流が容易になった。2015年11月7、8日には「徳島・板東ドイツ兵俘虜たちが遺した文化遺産顕彰事業」として徳島大学総合科学部ドイツ語教室および徳島日独協会との共催で講演会と音楽会、展示会を実施するなど、さまざまな企画は今後も継続する予定である。

徳島エンゲル楽団および(東富田)エンゲル合唱団²⁵の演奏会開催・出演記録

年月日	場所	内容・特記事項等
2000.1.30	徳島城庭園	ベートーベン田園・歓喜の歌、人形劇と共演
2001.11.25	徳島城庭園	吹奏楽・合唱(東富田エンゲル合唱団が翌年まで参加)
2002.11.17	徳島城庭園	管楽合奏・合唱、立木写真館エンゲル写真展
2004.3.14	県民広場 ^{*1}	徳島エンゲル楽団再結成、奥村智洋(Vn)初共演
2005.3.12	県民広場 ^{*1}	徳島エンゲル楽団・合唱団による主要演奏曲が定着
2006.3.21	徳島城庭園	徳島城博物館との共同開催、子供邦楽(以後継続)
2006.8.20	鳴門市ドイツ館	終戦記念ピースコンサート特別出演、各合唱団と共演
2007.3.21	徳島城庭園	徳島城博物館との共同開催
2007.11.3	徳島ホール	国民文化祭協賛、解説冊子作成(以後毎回改訂発行)
2009.3.20	あわぎんホール	徳島エンゲル楽団復活10周年、奥村智洋(Vn)
2010.2.11	あわぎんホール	南能衛顕彰(村祭、以後合唱または奥村氏独奏で継続)
2011.3.27	あわぎんホール	ハンゼン顕彰(ハイドン驚愕)、東日本大震災募金
2011.4.17	バルトの庭	バルトの庭一周年記念式典出演、林啓介(解説)
2011.10.23	バルトの庭	新設の野外舞台で公開リハーサルと演奏会
2012.5.19	あわぎんホール	国民文化祭協賛、奥村智洋(Vn)
2013.4.20	バルトの庭	徳島大学リーダークライスと共演、林啓介(解説)
2013.6.23	あわぎんホール	徳島大学交響楽団・徳島大学リーダークライスと共演 ベートーベン Vn 協奏曲 (Vn 独奏:奥村智洋)
2014.4.27	徳島城庭園	徳島城博物館との共同開催
2014.12.21	徳島大学 ^{*2}	俘虜来徳100周年 (Vn 独奏:奥村智洋)
2015.11.8	徳島大学 ^{*2}	徳島オーケストラ100周年、講演会・展示会・紙芝居

^{*1} 徳島県郷土文化会館前広場 ^{*2} 常三島キャンパス地域連携プラザけやきホール

²⁵ 東富田エンゲル合唱団は徳島エンゲル楽団とは別に活動を始め2002年演奏会まで出演。2004年以降のエンゲル合唱団は単独では活動せず徳島エンゲル楽団と共演している。